

# 穂学



令和3年度

広州日本人学校 学校便り

[No.7]

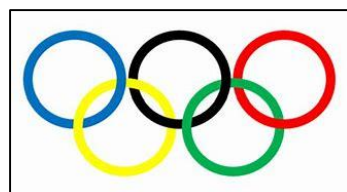
令和3年8月18日(水)

発行責任者 校長 加藤康徳

## 「空振りにも意味がある！」

今日から2学期が始まりました。この夏休みは中国国内の新型コロナウイルス感染拡大で移動に制限を受けた休みでした。ただ、広州市内においては6月に比べ生活に大きな影響が無かったようなので安心しました。学校は子どもに適切な教育を受けさせるために2学期も危機管理の改善を図りながら、クラスターの発生を防ぐことに重点を置いて教育活動を推進していきます。引き続き保護者の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

さて、今年度は東京オリンピックが開催されました。今回、稲葉監督が率いる野球日本代表チームが正式競技では初めて金メダルを獲得しました。この金メダル獲得へのストーリーは私にとって大変感慨深いものがあります。



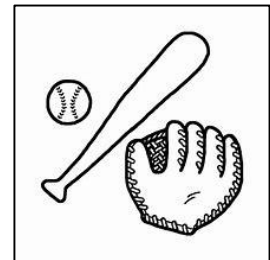
20数年前、私は山沿いの農村部にある児童数40名にも満たない小学校で野球を指導していました。団員は3年生から6年までの総勢12名でした。各種大会には出場してはいたのですが1回戦で負けてばかりいました。私は何とか子どもたちに試合に勝つことを教えたいと考え毎日子どもたちと汗を流して練習に励んでいました。しかし、6年生が主力の他校のチームには例え練習試合でも2年間勝つことはできませんでした。

こんなチームでしたが1度だけ試合に勝ったことがあります。全道大会にもつながらその1回戦目の試合では相手チームは練習の意味もあったのかエースではないピッチャーを登板させてきました。試合は大方の予想通りこちらは4回まで無得点（相手は4点）でした。うちのチームは後攻でした。5回の裏、1アウトとなった後、死球と四球でランナーが1、2塁となりました。ただ、次のバッターは9番（3年）です。3年生なので体も小さく、素振りをしてもバットが重くてバッターボックスの中で転んでしまうバッターでした。監督としては相手のピッチャーがストライクゾーンに投げづらいことを考え、バットを振らずに四球を選択する指示を出すこともできたのですが、日頃一所懸命にバットを振って練習している姿を見ているので間接的ではあっても「ただ立っているだけでいい。」という指示は出せませんでした。逆に「日頃の練習の成果を見せるために思いっきり振っておいで。」と言葉をかけ、バッターボックスに送り出しました。真面目な子だったのでどんなボール球でも思い切りバットを振り、空振りをする毎にバッターボックスで転んでいました。これで2アウトです。肩を落としてベンチに帰ってくる選手に「いいよ。全力で振っていたのがいい。」とねぎらいの言葉をかけ、この試合も負けを覚悟し、今日は試合後にどんな励ましの言葉を子どもたちにかけるのかを考えていました。そういうこともあって、次の1番バッター（5年）がバッターボックスに向かうのにも気付きませんでした。我に返ると既にピッチャーは振りかぶっていました。ところが、次の瞬間バッターは思いっきりボールをたたき、右中間にボールを運びました。ピッチャーは前のバッターの三振から油断して甘い球をど真ん中に投げたようです。思いもよらずボールが飛んでき

たことに驚いたのか、ライトの返球が遅れ、結果2点が入り、なおランナーが2塁となりました。次は2番（4年）です。ピッチャーは動揺しているようだったので私は「様子を見るように」と指示を出して送り出しました。予想通り粘った結果四球で出塁です。しかもその間、ワイルドピッチがあったのでランナーは3塁に進塁していました。これで、ランナーは1・3塁です。次は3番（6年）です。「1塁ランナーを進めるから2球は待つように。」と指示を出して送り出しました。盗塁成功です。明らかにピッチャーが動揺していることがその仕草から分かりました。次の投球はど真ん中に入り、打球はファーストの頭上を越え、ライトポール際の深いところにボールは転がっていきました。結果は3塁打でした。これで同点です。次は頼りになる4番（6年）です。相手側としてはピッチャーを代えるに代えられない状況だったようです。うちのバッターの5番以降は、また3・4年生が続きます。点を取るはこのバッターしかいないと思い、私は4番バッターに「相手チームは全員動揺しているから、バットを短く持って真ん中にボールが来たと思ったら思いっきり叩きなさい。2アウトだからフライが上がったら終わりになる。遠くに飛ばすことはないよ。」と指示を出しました。そして、2球目です。バッターは私の指示通りボールを思いっきり叩いたので、ボールは内野で高くバウンドしました。サードは捕球したのですが3塁ランナーが気になり送球に迷ったので結局どこにも投げる事が出来ませんでした。なんとこれで逆転です。そして、次の瞬間審判が「準決勝、決勝以外は1時間30分を過ぎて次のイニングには入らないという今回の試合のルールに基づき、この時点でこの試合は終了です」と宣言。跳び上がってその場で喜んでいる子ども達をなだめ、並んで礼をさせた後、全員でベンチ裏に移動しました。

試合後はいつもその場での反省会が決まりとなっていました。真っ先に私は、1球目にライト前にヒットを打った5年生に「よく1球目から自分で判断して思い切って打ったな。」と言ったら、「だって監督、9番（3年）に思いっきり振ってこいって言ったじゃない。僕の時は何も言わなかったから同じ指示だと思った。」と答えました。この子は横で私が9番（3年）に指示を出していたのをしっかりと聞いていたのです。

この回答からこの勝利は偶然だけでは無かったことが理解できました。最初の大きな空振りをきっかけにそれぞれの子どもがその役割を果たし、相手の動揺を誘い、結果それまでの2年間、練習試合でも1度も勝てなかったチームの勝利につながったようでした。私はどの子どもも褒めました。特に空振りをした子どもを「あの空振りが相手ピッチャーの油断を誘い勝利に結びついた。」ということで褒めてあげました。とても喜んでいました。当然選手層の薄いチームは同日に行われた2回戦目は負けました。ただ、この日の勝利は私にとってはオリンピックで金メダルを取ることと同じくらいに一生忘れることができない思い出となりました。今でもその時の光景が頭に浮かびます。試合に勝つことを教えたかった私が、試合に勝つ意味を子どもたちに教えられました試合でした。「空振りにも意味がある！」



ただの勝ち負けで一喜一憂することもあります。その結果をどのように捉え、どのように次に活かして行くのかは本当に考え次第です。この相手チームはその後、全道大会へ出場するような常勝チームになったと聞きました。ひょっとして自分たちも、そして相手チームも何かを変えることができた試合だったとしたら、それはとても素晴らしいことだとその時勝手に思いました。※翌年3月、学校は閉校となりチームも解散しました。

次はパリでオリンピックが開催されます。その時に「東京オリンピックは新型コロナで大変だったな〜。」と思ひ出話になることを期待してやみません。